

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 248

# 新池尻遺跡

県道南浦金光線道路改築に伴う発掘調査

2019

岡山県教育委員会



# 序

本書は、県道南浦金光線道路改築に伴い発掘調査を実施した、新池尻遺跡の発掘調査報告書です。

倉敷市玉島黒崎と浅口市金光町佐方を結ぶ県道南浦金光線では、現在建設が進められている浅口工業団地の完成により交通量の増大が予想されることから、一般国道2号（玉島・笠岡道路）金光ICまでの延長660mを対象とする拡幅工事が計画されました。岡山県教育委員会では、この工事区間に所在する新池尻遺跡の取扱いについて、関係部局と協議を重ねてまいりましたが、現状のまま保存することが困難な部分については、やむを得ず記録保存の措置を講じることとし、平成29年度に発掘調査を実施いたしました。

新池尻遺跡は、寄島山地北麓の浅口丘陵を北へ流れる佐方川の上流に位置します。調査の結果、弥生時代から平安時代にかけての集落跡であることが判明しました。なかでも、古墳時代後期後半の製錬滓と推察される鉄滓や炉壁片が出土したことは、この地域で行われた鉄生産を解明する上で、貴重な成果と言えます。

本書が地域史研究の資料として、また文化財保護の一助として活用されることを期待いたします。

発掘調査及び報告書作成に当たりましては、備中県民局をはじめとする関係機関や地元住民の皆様から御理解・御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成31年3月

岡山県古代吉備文化財センター  
所長 向井重明



# 例 言

- 1 本書は、県道南浦金光線道路改築に伴い、岡山県教育委員会が岡山県備中県民局建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センター（以下、文化財センター）が実施した、新池尻遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査を実施した新池尻遺跡は、浅口市金光町佐方3032-6ほかに所在する。
- 3 確認調査は平成28年度に文化財センター職員杉山一雄が担当して、平成28年5月12日～14日に実施した。調査面積は28㎡である。本発掘調査は平成29年度に文化財センター職員澤山孝之・氏平昭則・森本直人が担当して、平成29年4月1日～7月31日に実施した。調査面積は1,500㎡である。
- 4 本書の作成は、平成30年度に澤山が担当し、文化財センターにて実施した。
- 5 本書の執筆は、第2章第1節を文化財センター職員大橋雅也が、その他を澤山が担当した。全体の編集は澤山が行った。
- 6 本書の作成にあたり、石製品の材質に関する鑑定を鈴木茂之氏（岡山大学）に依頼して、有益な教示を受けた。記して厚く御礼申し上げる。
- 7 図版1に掲載した遺跡の遠景写真については、浅口市から所蔵写真の提供を得た。
- 8 遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 9 本書に収載した遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

# 凡 例

- 1 高度値は海拔高である。
- 2 調査区位置図・遺構図が示す北方位は、平面直角座標第Ⅴ系（世界測地系）の座標北である。
- 3 調査区位置図・遺構全体図・報告書抄録の座標値・経緯度は、世界測地系に準拠している。
- 4 遺構・遺物の縮尺は個々に明記している。
- 5 遺構全体図では遺構名を以下の略称を用いている。  
土坑：土 作業場：作 たわみ：た 柱穴：P
- 6 遺物番号は種類ごとに通し番号とした。また、土器以外の遺物はその材質を示すため、番号の頭に以下の略号を付している。  
土製品：C 石製品：S 鉄滓：M
- 7 土器実測図において、口縁部または底部を示す上・下端の線が中軸線の左右で途切れているものは、復元径が不確実であることを示している。
- 8 遺構図の網掛け部分は、炭・焼土・被熱痕跡等の範囲を示している。
- 9 土層と遺物の色調は、『新版標準土色帖』2002（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修）、『新版色の手帖』2002（永田泰弘監修 株式会社小学館）に準拠している。
- 10 周辺遺跡分布図は、国土地理院の「電子地形図25000」を使用し、加筆したものである。
- 11 時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、必要に応じて文化史区分・世紀などを併用している。
- 12 遺構一覧表及び遺物観察表の数値欄の表記は、以下の意味を示している。  
数 値：完存値。土器は1/6以上残存している場合の推定復元値も含む  
(数 値)：残存値  
[数 値]：推定復元値。土器は1/6未満の残存、または歪みが大きい場合の推定復元値  
－：計測不能。該当部分自体が残存・存在しない

# 目 次

序

例言

凡例

目次

第1章 地理的・歴史的環境……………1

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過……………5

第1節 調査に至る経緯……………5

第2節 発掘調査の経過……………6

第3節 報告書作成の経過……………6

第4節 日誌抄……………7

第5節 発掘調査及び報告書作成の体制……………7

第3章 発掘調査の成果……………9

第1節 1・2区……………9

第2節 3区……………11

第4章 総括……………19

遺構一覧表

遺物観察表

図版

報告書抄録

## 図目次

第1図	遺跡位置図 (1/1,500,000)……………	1	第13図	土坑1 (1/30)……………	14
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)……………	2	第14図	土坑2 (1/30)・出土遺物 (1/4)……	14
第3図	調査区位置図 (1/1,000)……………	5	第15図	土坑3 (1/30)……………	14
第4図	1・2区全体図 (1/600)……………	9	第16図	土坑4 (1/30)……………	14
第5図	1・2区西壁基本土層柱状模式図 (1/60)……………	10	第17図	土坑5 (1/30)……………	14
第6図	1区南壁断面図 (1/60)……………	10	第18図	作業面1 (1/30)……………	15
第7図	1・2区包含層出土遺物 (1/4・1/3・1/2)……………	11	第19図	たわみ1 (1/60)・出土遺物 (1/4)……	15
第8図	3区遺構全体図① (1/300)……………	12	第20図	たわみ2 (1/60)……………	16
第9図	3区遺構全体図② (1/300)……………	12	第21図	たわみ3 (1/60)・出土遺物 (1/4)……	16
第10図	3区東壁基本土層柱状模式図 (1/60)……………	13	第22図	柱穴1 (1/30)・出土遺物 (1/4)……	17
第11図	3区南壁断面図 (1/60)……………	13	第23図	柱穴2 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)……………	17
第12図	3区中央東西断面図 (1/30)……………	13	第24図	柱穴3 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/1)……………	18
			第25図	3区包含層出土遺物 (1/4・1/2)……	18

## 図版目次

図版1		3	3区西側完掘状況 (南から)
1	新池尻遺跡遠景 (南から、浅口市所蔵)		図版3
2	1区南側完掘状況 (北から)	1	3区東側完掘状況 (北から)
3	2区南側完掘状況 (北から)	2	たわみ1 (西から)
図版2		3	柱穴2 (南から)
1	2区西側完掘状況 (北から)	図版4	
2	3区南側完掘状況 (北から)		出土土器・土製品・石製品・鉄滓

## 表目次

表1	文化財保護法に基づく文書一覧……………	8	表3	遺物観察表……………	21
表2	遺構一覧表……………	21			



## 第1章 地理的・歴史的環境

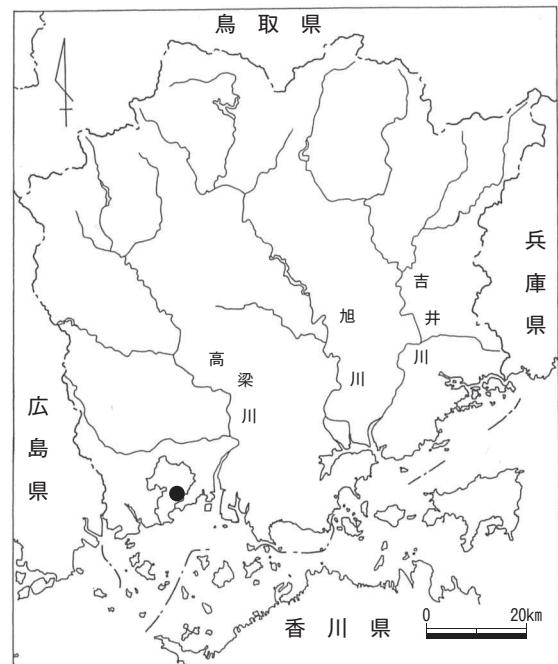
新池尻遺跡は岡山県南西部の浅口市金光町佐方に所在する。浅口市は東側を倉敷市、西側を浅口郡里庄町と笠岡市、北側を小田郡矢掛町と接し、南側は瀬戸内海に面している。県地形区分によれば、浅口市は瀬戸内沿岸山地と瀬戸内沿岸平野に属しており、市内を詳しく俯瞰すると、北部には標高300～400mの遙照山山地が、南部には標高150～250mの寄島山地がそれぞれ南西から北東方向に延びている。そして、遙照山山地南麓と寄島山地北麓の裾部には標高50～200mの浅口丘陵が取り囲んでおり、さらに、この丘陵の端部からは鴨方低地と呼ばれる平野が広がっている。特に鴨方・金光地域を東流して玉島湾へとつながっている里見川の流域は里見川低地と呼ばれており、市域を流れる中小河川によって形成された氾濫原と、寛文～延宝年間に造成された干拓地で構成されている。一方、瀬戸内海に面する寄島山地南麓はリアス式海岸を呈しており、寄島や倉敷市玉島黒崎地域などでみられる平地の少ない海岸線となっている。

遺跡は寄島山地北麓の浅口丘陵を北へ流れる佐方川の上流に立地している。この北麓付近には多くの溜池が構築されており、遺跡はその1つである「新池」の北側で確認された。この「新池」とその東方にある「中池」との間には、寄島山地から北西に延びる比高差約30～40mを測る低丘陵が存在している。調査対象地はこの低丘陵の裾部の旧地形に沿うように作られた水田・畑地や果樹園などに利用されていた。

周辺の遺跡概要をみると、古くは旧石器時代まで遡り、沿岸部では山王遺跡・帆崎遺跡など、内陸部では別所寺ノ奥遺跡が知られており、こうした状況から広域に移動している人間活動が想起される。

縄文時代の遺跡では、沿岸部に位置する安倉八幡遺跡・東安倉遺跡などが認められる。内陸部では新池尻遺跡の北約600mに位置し、佐方川流域の低地に位置する宮原遺跡がある。発掘調査によって、中期末～後期初頭を主体とする土器や石鏃・凹石などの石製品、サヌカイト石核が出土していることから、遺跡周辺に安定した集落が存在していたと考えられる。

弥生時代に入ると遺跡数は増加する。佐方川流域では、浅口丘陵の端部の緩斜面に位置する長津遺跡で土器や石包丁などがみついている。池田池西側の丘陵頂部に立地する弥生時代後期の集落跡である大鳥内遺跡では、竪穴住居が検出されており、土器やサヌカイトなどが出土している。また、丘陵北側にあたる低地では混貝土層を確認した小西原貝塚があり、土器や石鏃・石斧などが出土している。このことから当時の海岸線が貝塚周辺近くに存在した可能性が示されており、当時のこの地域の旧地形を考える上で、興味深い見解といえる。



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)



- |            |           |            |               |            |            |              |
|------------|-----------|------------|---------------|------------|------------|--------------|
| 1 新池尻遺跡    | 2 森山遺跡    | 3 算用々岡塚古墳  | 4 仏堂遺跡        | 5 神田遺跡     | 6 北平奥迫遺跡   | 7 鴻の巣山遺跡     |
| 8 五反田遺跡    | 9 池平遺跡    | 10 池平東遺跡   | 11 伴ノ木遺跡      | 12 森迫貝塚    | 13 泉山城跡    | 14 上原塚古墳     |
| 15 古寺跡1号墳  | 16 古寺跡2号墳 | 17 古寺跡3号墳  | 18 古寺跡4号墳     | 19 天神山塚古墳  | 20 真山戸山遺跡  | 21 真山止山下原塚古墳 |
| 22 侍山塚古墳   | 23 永広塚古墳  | 24 軽部荒神塚古墳 | 25 向ヶ市塚古墳     | 26 タンコ山古墳  | 27 小西原貝塚   | 28 岸名遺跡      |
| 29 名称未定(窯) | 30 寺ヶ市遺跡  | 31 長津遺跡    | 32 名称未定(散布地)  | 33 長山城跡    | 34 奈良井古墳   | 35 須恵龍王山城跡   |
| 35 奈良井遺跡   | 36 宮原1号墳  | 37 宮原遺跡    | 38 佐方城跡(鬼打城跡) | 39 別所寺ノ奥遺跡 | 40 別所寺ノ奥遺跡 |              |
| 41 大鳥内遺跡   | 42 龍王山城跡  | 43 殿山古墳    | 44 東安倉遺跡      | 45 海楽寺跡    | 46 原古墳     | 47 東安倉遺跡     |
| 48 七社神社北古墳 | 49 帆崎遺跡   | 50 山王遺跡    |               |            |            |              |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

一方、佐方川と同様に浅口丘陵を北へ流れる堅川流域をみると、それぞれ丘陵端部の斜面地に立地する仏堂遺跡・北平奥迫遺跡・池平遺跡・五反田遺跡などがあり、いずれも土器や石器などがみつまっている。また、伴ノ木遺跡は発掘調査によって土坑や柱穴を確認しており、弥生時代中期の土器が多数出土している。里見川流域では丘陵から延びる低台地上に森山遺跡があり、発掘調査によって堅穴住居や柱穴列が確認され、土器や石器、分銅形土製品が出土している。このように弥生時代の集落は中小河川を臨む丘陵・台地の縁辺部を中心に形成されていた様子が窺え、低地や微高地上では認められていない。

古墳時代の前期古墳をみると、鴻の巢山遺跡が初期の古墳とされ、庄内式土器と類似する土器群が出土している。これに続く古墳として、箱式石棺を主体部とする小規模な円墳が造営される。このうち、堅川上流域で四条原古墳群を構成する侍山塚古墳は2基の箱式石棺をもち、このうち1号石棺の内部は朱塗りの可能性がある。また、タンゴ山古墳の2基の箱式石棺のうち、2号石棺には人骨1体が残存し、刀剣・銅鏃が発見されている。その他、算用々岡塚古墳でも2基の箱式石棺が存在し、人骨や剣等が出土したと伝わる。

後期古墳では横穴式石室墳が増加する。前期に引き続き四条原古墳群では、上原塚古墳・古寺跡1～4号墳・軽部荒神塚古墳・永広塚古墳などが築かれ、盛んな造墓活動が認められる。特に天神山塚古墳（奥壁幅2m）・真山戸山下原塚古墳（同1.75m）・向ヶ市塚古墳（同1.75m）の石室規模は大形であり、この地域の有力層の古墳と思われる。一方、佐方川の流域では、堅川流域ほどの造墓活動はみられないものの、新池尻遺跡の北東約700mに宮原1号墳（同2m）が築かれており、石室規模からみてこの地域を代表する古墳といえる。また、奈良井古墳は7世紀初頭に築造された直径9m弱の円墳であることが発掘調査によって明らかとなった。その他、寄島山地南側では横穴式石室墳の殿山古墳・原古墳や七社神社北古墳が築かれている。なお、この地域では前方後円墳は築造されていない。

古墳以外の遺跡をみると、佐方川流域の丘陵端部の緩斜面に位置する岸名遺跡では、発掘調査によって古墳時代後期の堅穴住居11軒が検出されている。また遺跡周辺の丘陵上では10基程度の須恵器窯の存在が推定されており「金光須恵古窯跡群」などと呼ばれる。また、寺ヶ市遺跡では古墳時代の土坑・溝・柱穴などを確認している。新池尻遺跡の北約700mに位置する奈良井遺跡では、発掘調査によって谷部の堆積土から7世紀代の須恵器片が多数出土した。特に焼け歪みや溶着した須恵器片と窯壁片の出土から、遺跡付近で須恵器窯の操業が推定された。なお、先述した奈良井古墳と近接していることから、両者の関係性が示唆される。

古代の遺跡をみると、佐方川流域では長津遺跡の東方約100mに位置し、丘陵端部に築かれた名称未定の平安時代の瓦窯が2基存在したとされる。堅川流域では吉池北側の丘陵頂部に位置する池平東遺跡で須恵器が出土しており、礎石1基を検出している。また、寄島山地南側では京都醍醐寺の流れを汲む海楽寺跡が覚善坊によって建立され、明治初期に廃寺となったとされる。その他、浅口丘陵の南端にあたる浅口市金光町占見の占見廃寺では礎石が検出され、複弁八葉蓮華文軒丸瓦、平城宮系6225軒丸瓦、平城宮系6663軒平瓦、均整唐草文軒平瓦などが出土している。創建時期は7世紀後半で、8世紀中葉に整備・修理とされる。この占見廃寺の東方には、奈良時代の瓦窯と思われる山崎1・2号窯が築かれている。なお、養和元(1181)年12月8日に後白河院庁が新熊野所司らに下した下文案に、新熊野社領28か所の1つとして佐方荘がみえる。佐方荘は「和名類聚抄」の大島郷に成立した荘園として、浅口市金光町佐方付近が比定されている。

中世の遺跡をみると、佐方川流域では丘陵端部から低位部にかけて名称未定の散布地が広がっている。堅川流域では丘陵の緩斜面に位置する神田遺跡で確認調査によって土坑を確認している。また、森迫貝塚では畑に貝塚が2mほどの規模で露呈していたとされる。丘陵端部に位置する真山戸山遺跡は古墓であり、亀山焼が散布している。なお、浅口市鴨方町六条院中の真山戸山不動坊窯跡では亀山焼の窯が数基操業していたとみられている。

中世山城は比較的近接した位置関係で認められる。寂光院西の山頂に築かれた須恵竜王山城跡は南北10.5m×東西31.5mの主郭を有しており、南に下った鞍部で堀切・土塁が認められる。標高132mの長山の山頂に築かれた長山城跡は東西25m、南北50mの主郭を有し、その北側には小曲輪、東側には細長い曲輪と土塁が認められる。佐方城跡（鬼打城跡）は3面の曲輪と堀切・堅堀が設けられている。佐井氏の後、村上氏が居城したと伝えられる。竜王山城跡は山頂に曲輪・堅堀が認められ、佐井七朗が居城したと伝えられる。標高220mの明王院山山頂に築かれた泉山城跡は30×25mほどの曲輪があり、鴨山城跡の出城とみられている。全体的にみると、比較的簡易な防御施設を有するものが多い。

### 主要参考文献

『寄島町誌』町誌編纂委員会 1966

「〔7〕岸名遺跡発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』9 岡山県教育委員会 1979

『鴨方町史』本編 鴨方町史編纂委員会 1990

『金光町史』本編 金光町史編纂委員会 2003

亀田修一「第三章 白鳳時代創建の寺院 第三節 備中（6）占見廃寺」『吉備の古代寺院』吉備人出版 2006

「森山遺跡」『浅口市埋蔵文化財発掘調査報告』1 浅口市教育委員会 2008

「竹林寺天文台遺跡」『浅口市埋蔵文化財発掘調査報告』2 浅口市教育委員会 2009

定金司郎『浅口市の地質時代を考える』浅口市教育委員会 2009

「宮原遺跡 奈良井古墳 奈良井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』237 岡山県教育委員会 2013

「竹林寺天文台遺跡」2『浅口市埋蔵文化財発掘調査報告』3 浅口市教育委員会 2016

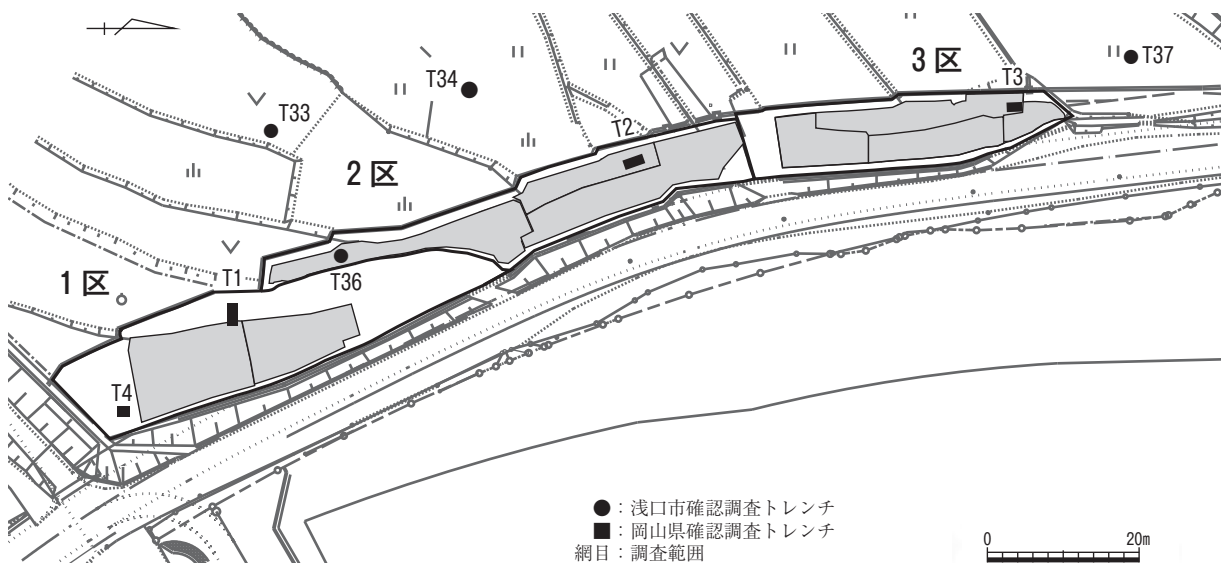
## 第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

県道南浦金光線は、倉敷市玉島黒崎を起点とし、浅口市金光町佐方に至る補助幹線道路である。国が整備を進める一般国道2号（玉島・笠岡道路）と一体になり、国道2号の慢性的な渋滞の緩和とアクセス向上を図り、地域の発展、活性化を促進するべく建設事業が進められてきた。平成27年3月には国道2号（玉島・笠岡道路）玉島西IC～金光IC間が開通し、この側道として県道南浦金光線も一部が整備された。なお、国道2号（玉島・笠岡道路）とあわせたこの事業区間には、宮原遺跡・奈良井古墳・奈良井遺跡が所在しており、平成23年度に記録保存調査を実施している<sup>(1)</sup>。

この度の県道整備の事業区間は、浅口市が建設整備を進めている浅口工業団地と国道2号（玉島・笠岡道路）金光IC間を南北に結ぶ延長660mの区間である。この区間は現況幅員が狭小で、大型車のすれ違いが困難な状況であり、工業団地の完成によって予想される交通量の増大に対応する必要がある。このため適切な幅員確保による交通の円滑化と安全性の向上のため、幅員拡幅が計画された。このような状況の中、平成28年3月に備中県民局建設部から県教育庁文化財課に埋蔵文化財包蔵地の有無についての照会がなされた際、工事は平成28年度当初から着手し、年度中に完成させる計画で進んでいることが示された。事業箇所周辺地では、浅口市工業団地造成に先立ち、浅口市教育委員会による確認調査が行われており、一部で埋蔵文化財包蔵地が広がることが確認されていたことから、文化財課は記録保存調査が必要であると判断した。これに伴い、路線内の確認調査を速やかに行い、その結果に基づいて調査の範囲、時期、期間など具体的な対応について協議を行うこととなった。

確認調査は5月12日～14日に4か所のトレンチを設定し、実施した（第3図）。この結果、拡幅計画のある延長660mのうち、南側の約140m区間に弥生時代以降の遺構や遺物包含層の存在が明らかと



第3図 調査区位置図（1/1,000）

なり、調査必要範囲を確定した。

すでにこの時点で事業地北側から一部で工事が着手されていたことから、県土木部道路建設課、備中県民局建設部と緊急に対応の協議を重ねた。そして、調査が必要な該当箇所の工事を中断し、平成29年度に記録保存調査を実施した後に工事を再開することとなった。なお、事業地と隣接する水田間の水路工事については、規模が狭小であることから、平成28年度に立会調査を行い、適宜記録を作成して、発掘調査の参考とした。

以上の経緯の中で、備中県民局長から平成28年4月1日付けで文化財保護法94条に基づく発掘の通知が提出され、4月28日付けで県教育委員会が発掘調査の勧告を行った。発掘調査は平成29年4月に着手し、7月に終了した。

## 註

(1)「宮原遺跡 奈良井古墳 奈良井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』237 岡山県教育委員会  
2013

## 第2節 発掘調査の経過

発掘調査は平成29年4月3日～7月31日に文化財センター職員3名が担当した。調査区は現地地形を踏まえて、南側から順に1区、2区、3区と設定した。ただし、排土処理や調査対象地に西接する田畑への進入路確保のため、最終的に1区は2分割、2区は3分割、3区は4分割して作業を行った（第3図）。調査は1区、3区、2区の順に着手した。

確認調査の成果を基に、表土・造成土・近世以降の水田層を重機で除去した後、中世包含層から人力で掘削を行いながら遺構の検出作業を進めた。その結果、1・2区では、遺物包含層から弥生時代～中世の遺物が出土したものの、標高約32mから35mまで北東方向に下がる自然地形を確認したのみであり、明確な遺構面を確認することができなかった。3区では、標高約32m付近で弥生～平安時代の集落を確認した。このうち、古墳時代後期後半のたわみからは、須恵器片と製錬滓と推察される鉄滓や炉壁片が出土した。また、平安時代中期の柱穴1本からは、黒色土器・緑釉陶器片と暗緑色を呈する碁石状石製品が出土した。中世段階の調査対象地の状況は判然としないが、少なくとも近世以降は、水田として利用されたことが明らかになった。

## 第3節 報告書作成の経過

報告書作成は、平成30年9月3日～12月28日に文化財センター職員1名が担当した。遺物は復元・実測・浄書作業を行い、一部の遺物は写真撮影を実施した。遺構は調査で作成した実測図の浄書作業を行い、掲載用写真を選別した。その後に割付を行い、原稿執筆・編集作業及び遺物等を収納した。本書では土器36点、土製品1点、石製品11点、鉄滓1点、遺構は土坑5基、作業面1か所、たわみ3か所、柱穴3本について掲載した。

## 第4節 日誌抄

<p><b>平成28年度（確認調査）</b></p> <p>平成28年</p> <p>5月12日(木) 資材搬入、確認調査開始</p> <p>5月14日(土) 資材撤収、確認調査終了</p> <p><b>平成29年度（発掘調査）</b></p> <p>平成29年</p> <p>4月3日(月) 発掘調査開始</p> <p>4月13日(木) 発掘資材搬入、重機掘削開始</p> <p style="padding-left: 2em;">1区調査開始</p> <p>4月27日(木) 3区調査開始</p>	<p>5月23日(火) 1区調査終了</p> <p>5月25日(木) 2区調査開始</p> <p>7月11日(火) 2・3区調査終了</p> <p>7月14日(金) 発掘資材搬出</p> <p>7月19日(水) 重機埋め戻し終了</p> <p>7月31日(月) 発掘調査終了</p> <p style="text-align: center;"><b>平成30年度（報告書作成）</b></p> <p>平成30年</p> <p>9月3日(月) 報告書作成開始</p> <p>12月28日(金) 報告書作成終了</p>
---	--

## 第5節 発掘調査及び報告書作成の体制

<p><b>平成28年度</b></p> <p><b>岡山県教育委員会</b></p> <p>教育長 竹井 千庫</p> <p><b>岡山県教育庁</b></p> <p>教育次長 内田 広之</p> <p><b>文化財課</b></p> <p>課長 小見山 晃</p> <p>参事(文化財保存・活用担当) 横山 定</p> <p>総括参事(班長) 大橋 雅也</p> <p>主幹 杉山 一雄</p> <p>主任 平井 健太</p> <p><b>岡山県古代吉備文化財センター</b></p> <p>所長 宇垣 匡雅</p> <p>次長(総務課長事務取扱) 成本 俊治</p> <p>〈総務課〉</p> <p>総括主幹(総務班長) 金藤 賢史</p> <p>主任 浦川 徳子</p> <p>主任 山内 基寛</p> <p>〈調査第一課〉</p> <p>課長 亀山 行雄</p> <p>総括副参事(第一班長) 尾上 元規</p>	<p>主幹(文化財課本務) 杉山 一雄 (確認調査担当)</p> <p><b>平成29年度</b></p> <p><b>岡山県教育委員会</b></p> <p>教育長 竹井 千庫</p> <p><b>岡山県教育庁</b></p> <p>教育次長 日比謙一郎</p> <p><b>文化財課</b></p> <p>課長 小見山 晃</p> <p>参事(文化財保存・活用担当) 横山 定</p> <p>総括副参事(埋蔵文化財班長) 柴田 英樹</p> <p>主幹 平井 健太</p> <p>主任 上梶 武</p> <p><b>岡山県古代吉備文化財センター</b></p> <p>所長 宇垣 匡雅</p> <p>次長(総務課長事務取扱) 高田 亮</p> <p>参事(文化財保護担当) 大橋 雅也</p> <p>〈総務課〉</p> <p>総括副参事(総務班長) 金藤 賢史</p> <p>主任 浦川 徳子</p> <p>主任 東 恵子</p>
---	---

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

<p>〈調査第二課〉</p> <p>課長 高田恭一郎</p> <p>総括副参事(第一班長) 澤山 孝之 (調査担当)</p> <p>副参事 氏平 昭則 (調査担当)</p> <p>主事 森本 直人 (調査担当)</p> <p>平成30年度</p> <p>岡山県教育委員会</p> <p>教育長 鍵本 芳明</p> <p>岡山県教育庁</p> <p>教育次長 日比謙一郎</p> <p>文化財課</p> <p>課長 大西 治郎</p> <p>参事(文化財保存・活用担当) 横山 定</p>	<p>総括副参事(埋蔵文化財班長) 柴田 英樹</p> <p>主幹 上楯 武</p> <p>主任 原 珠見</p> <p>岡山県古代吉備文化財センター</p> <p>所長 向井 重明</p> <p>次長(総務課長事務取扱) 高田 亮</p> <p>参事(文化財保護担当) 大橋 雅也</p> <p>〈総務課〉</p> <p>総括主幹(総務班長) 甲元 秀和</p> <p>主任 浦川 徳子</p> <p>主任 東 恵子</p> <p>〈調査第二課〉</p> <p>課長 亀山 行雄</p> <p>総括副参事(第一班長) 澤山 孝之 (整理担当)</p>
---	--

表1 文化財保護法に基づく文書一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

番号	文書番号 日付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	調査期間
1	岡吉調 第25号 H28.5.20	周知	散布地・集落跡 新池尻遺跡	浅口市金光町佐方 3032-6ほか	28	県道南浦金光線 道路改築	有	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	杉山一雄	H28.5.12～ H28.5.14

埋蔵文化財発掘の通知(法第94条)

番号	文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	目的	通知者	通知日	主な勧告事項
1	教文理 第481号 H28.4.28	散布地 新池尻遺跡	浅口市金光町佐方 3032-6ほか	1,500	道路	岡山県備中県民局長	H28.4.1	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告(法第99条)

番号	文書番号 日付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	調査期間
1	岡吉調 第5号 H29.4.1	周知	集落跡 新池尻遺跡	浅口市金光町佐方 3032-6ほか	1,500	県道南浦金光線 道路改築	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	澤山孝之 氏平昭則 森本直人	H29.4.1～ H29.7.31

遺物発見通知(法第100条)

番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文理 第275号 H28.5.20	弥生土器・土師器・須恵器・ 国産磁器 計 整理箱1箱	浅口市金光町佐方3032-6・ 11,3043-4,3044-4 新池尻遺跡	H28.5.12～ H28.5.14	岡山県教育委員会 教育長	岡山県	岡山県古代吉備 文化財センター
2	教文理 第495号 H29.7.18	弥生土器・須恵器・土師器・ 陶磁器・石器・鉄滓 計 整 理箱10箱	浅口市金光町佐方 3032-6ほか 新池尻遺跡	H29.4.1～ H29.7.14	岡山県教育委員会 教育長	岡山県	岡山県古代吉備 文化財センター



## 第3章 発掘調査の成果

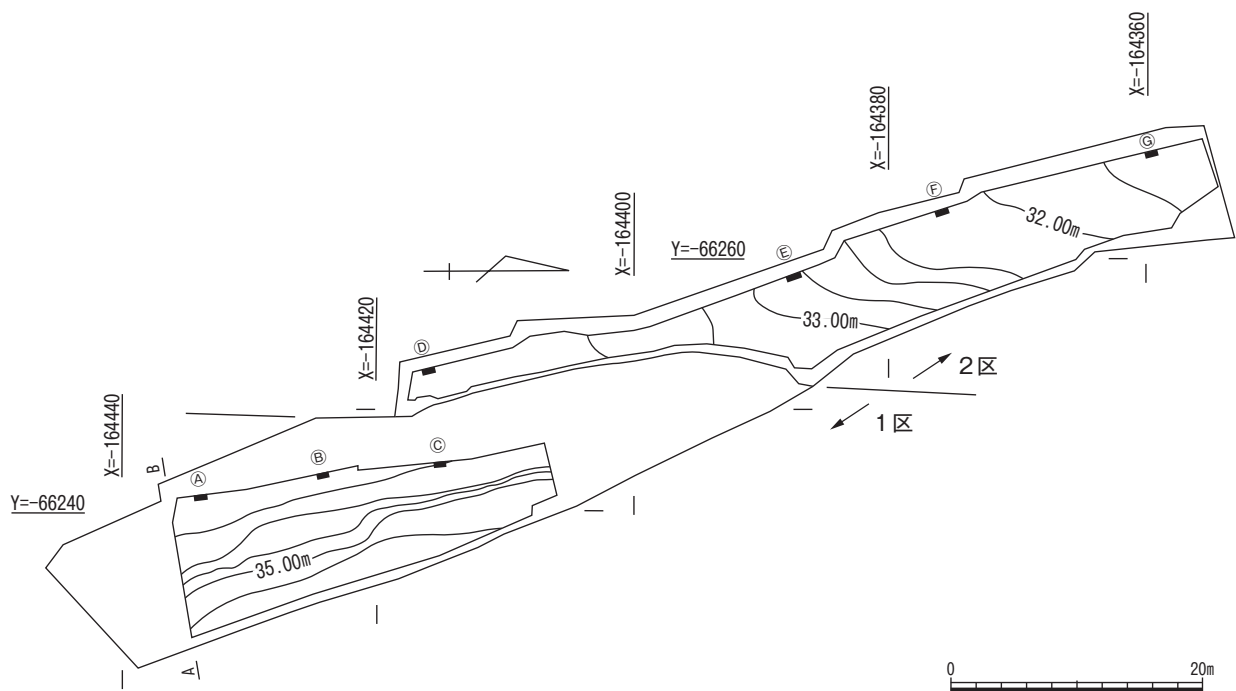
### 第1節 1・2区

#### 1 概要

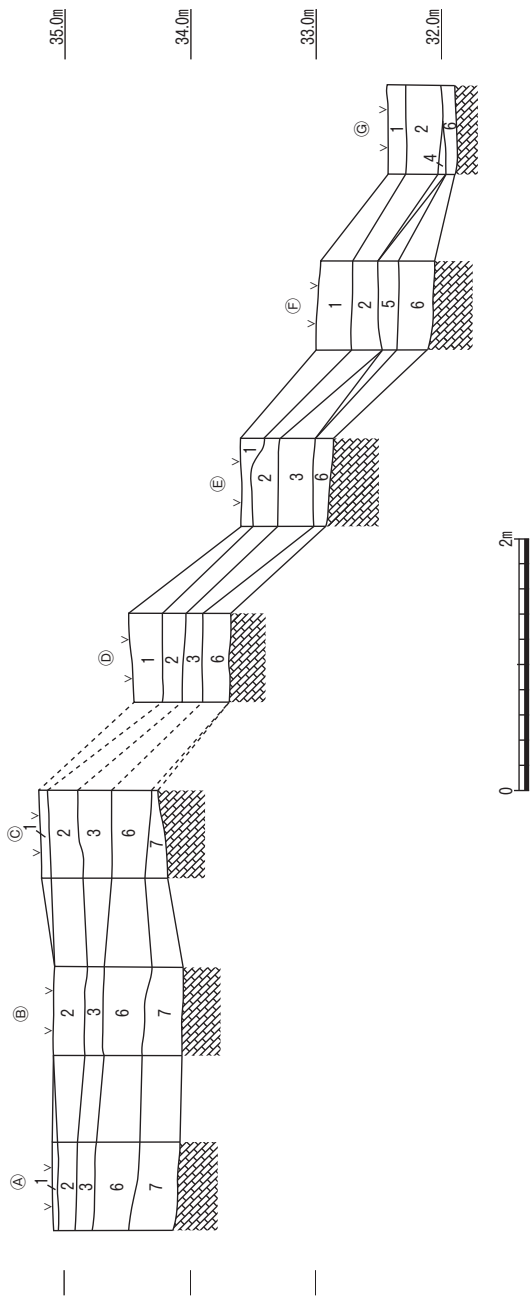
1区は今回の調査対象地の南側、2区は中央に位置し、調査前は水田・畑や果樹園として利用されていた。確認調査の成果に基づき、表土・造成土・堆積土及び近世以降の水田層に相当する第1～4層は重機で除去した。その後、近世以降溝の第5層と中世包含層以下の第6・7層は人力で掘削しながら、遺構の検出作業を進めた(第5図)。その結果、遺物包含層からは弥生時代～中世の遺物が出土したものの、明確な遺構面を確認することができなかった(第4図)。

旧地形をみると、1・2区は標高約32～35mの高さにあたり、1区付近は東から西方向に傾斜し、2区にかけては斜度が緩くなりながら南から北方向に下がっていた。特に1区南側は急な斜面地であり、生活面が広がっていたとは考えにくい状況であった(第6図)。改めて遺跡周辺の地形をみると、調査対象地の東側には新池と中池に挟まれるように北方向に延びる低丘陵があり、両区の旧地形はこの裾部の状況を示していると思われる。そうしたことから、この出土遺物は上方からの流れ込みの可能性が考えられ、生活の中心はこの丘陵の頂部であったと思われる。

なお、1・2区から約10～15m西方に位置する浅口市の確認調査のT33では、弥生時代包含層の除去後に土坑4基を、またT34でも土坑3基と溝1条を検出している(第3図)。この周辺は丘陵から

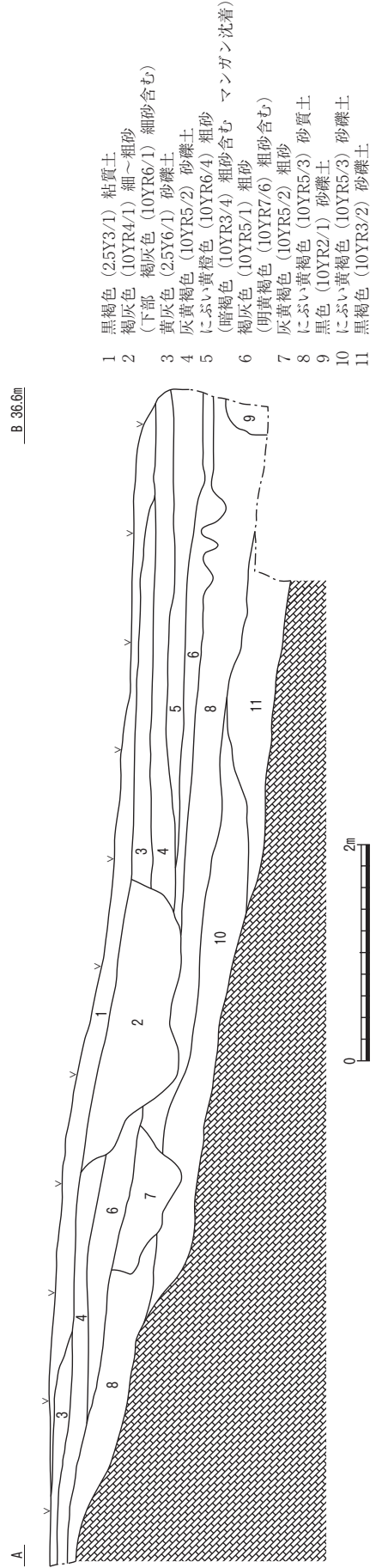


第4図 1・2区全体図 (1/600)



- 1 表土・耕作土
- 2 造成土
- 3 堆積土
- 4 近世以降水田層
- 5 近世以降薄
- 6 遺物包含層 (上層)
- 7 遺物包含層 (下層)

第5図 1・2区西壁基本土層柱状模式図 (1/60)



- 1 黒褐色 (25Y3/1) 粘質土
- 2 褐灰色 (10YR4/1) 細～粗砂 (下部 褐灰色 (10YR6/1) 細砂含む)
- 3 黄灰色 (25Y6/1) 砂礫土
- 4 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂礫土 にふい黄褐色 (10YR6/4) 粗砂
- 5 (暗褐色 (10YR3/4) 粗砂含む マンガン沈着)
- 6 褐灰色 (10YR5/1) 粗砂 (明黄褐色 (10YR7/6) 粗砂含む)
- 7 灰黄褐色 (10YR5/2) 粗砂 にふい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土
- 8 黒色 (10YR2/1) 砂礫土 にふい黄褐色 (10YR5/3) 砂礫土
- 9 黒褐色 (10YR3/2) 砂礫土
- 10 黒褐色 (10YR3/2) 砂礫土
- 11 黒褐色 (10YR3/2) 砂礫土

第6図 1区南壁断面図 (1/60)

離れた場所に位置しており、1・2区と比べて傾斜が緩やかである。そうしたことから、T33・T34では遺構が確認できたと思われ、この状況は後述する3区の弥生時代の遺構にあり方と類似している。

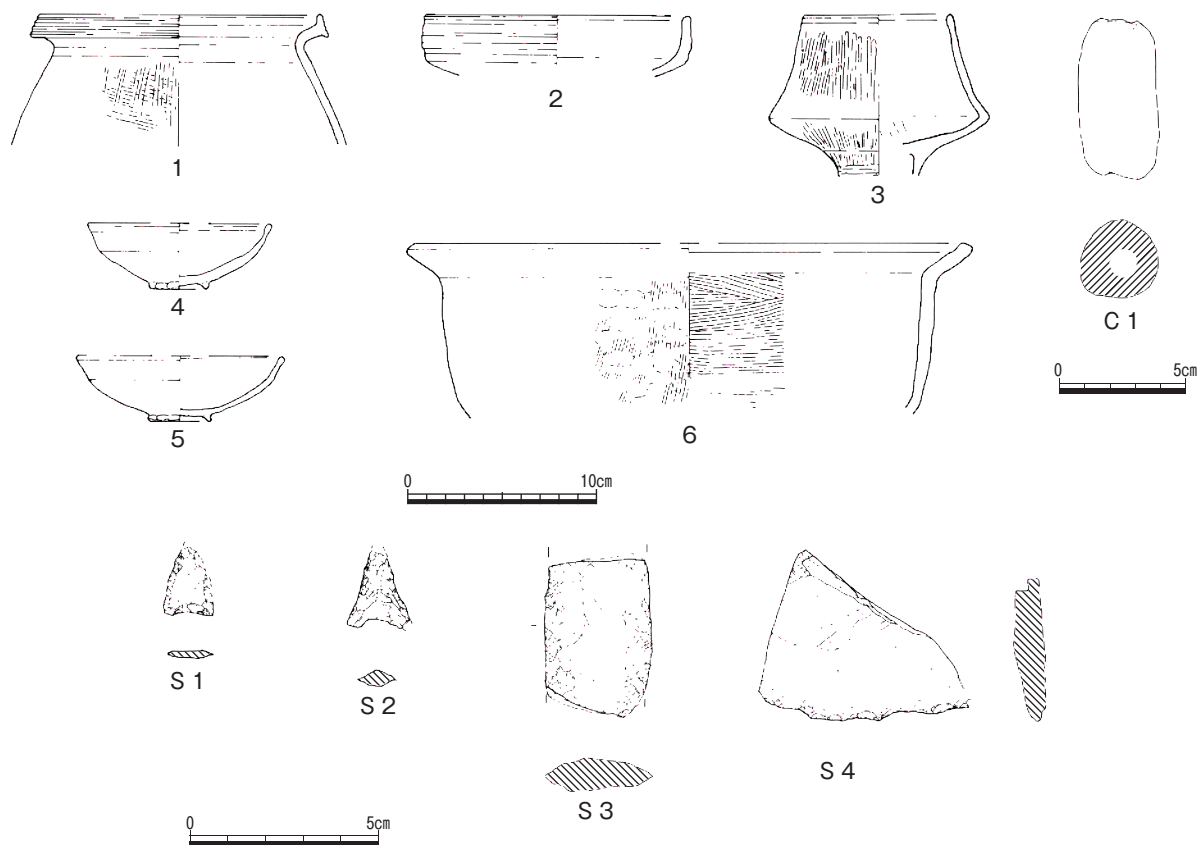
## 2 遺物

ここでは主に第6・7層相当の土層（第5図）から出土した遺物を報告する（第7図、図版4）。遺物量は1・2区とも整理箱に1箱程度であり、弥生土器では甕1、高杯2、台付鉢3が認められる。中世の遺物としては土師器碗4・5が出土している。なお、古墳時代の遺物については、両調査区ともほとんどみつかっていない。土製品では重さ62.63gを量る袋網系の管状土錘C1がみられる。石製品では石鏃が出土しており、S1が平基式、S2が凹基式である。S3は縦方向に大きい剝離面を残しながら、腹背の側面に階段状の剝離を行っており、断面形が扁平な六角形を呈している。こうした特徴から石槍の破片と思われる。S4はスクレーパーである。図化し得ていないが、この他に弥生土器・土師器の小破片などが出土している。また、サヌカイトの小石核や剝片が認められることから、遺跡周辺で石器製作が行われたと思われる。

## 第2節 3区

### 1 概要

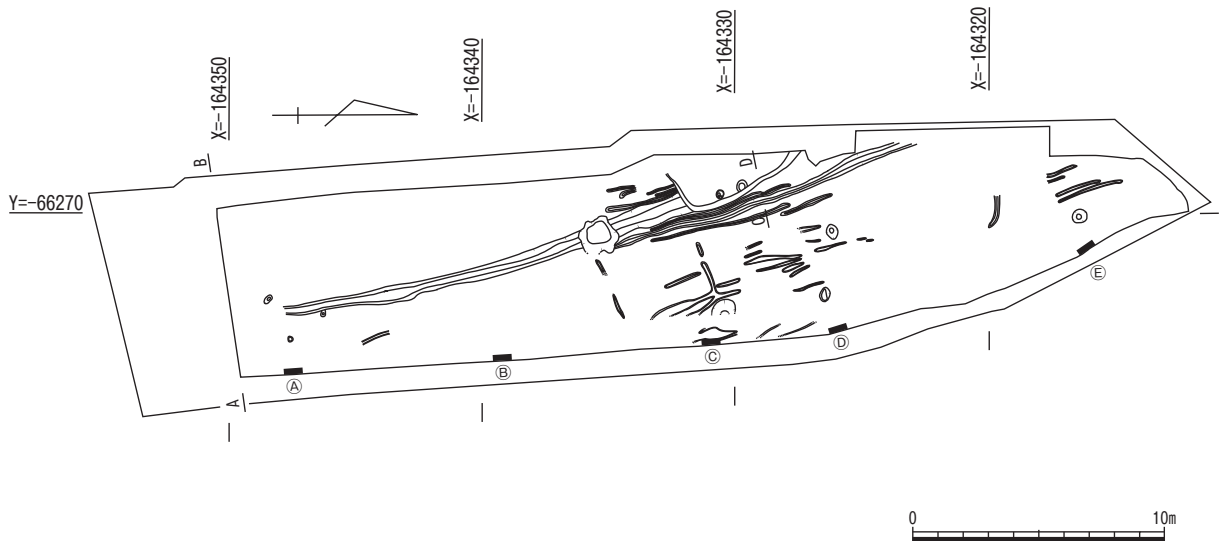
3区は今回の調査対象地の北側に位置し、調査前は水田として利用されていた。確認調査の成果に



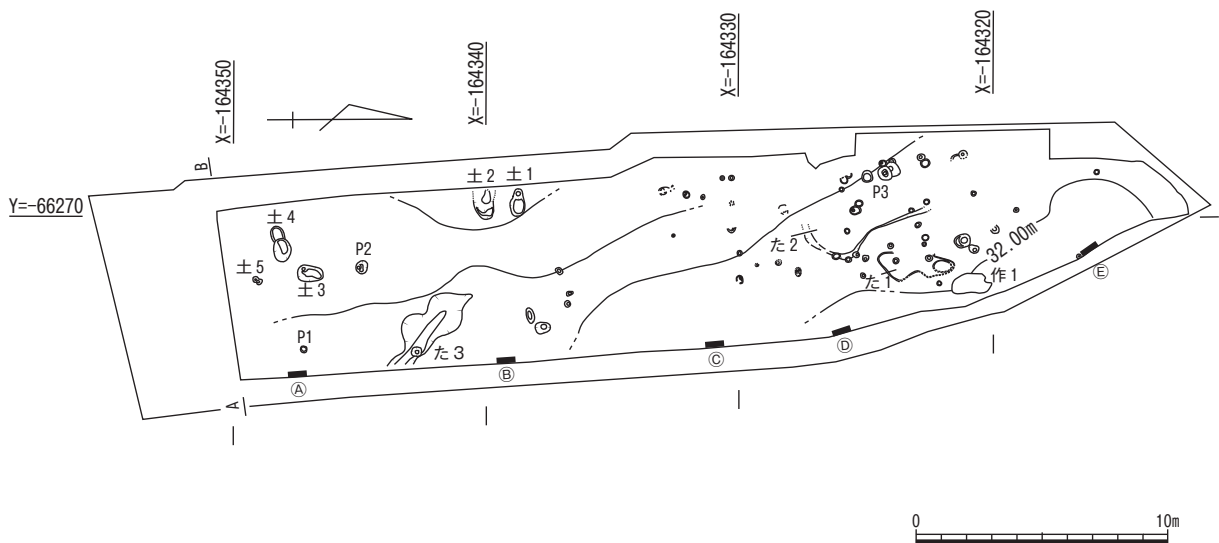
第7図 1・2区包含層出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

基づき、表土・造成土・堆積土及び近世以降の水田層に相当する第1・2層は重機で除去した（第10図）。その結果、調査区西側では南東から北西に向かって流れていた用水路と思われる溝を1条検出した。規模は幅27～92cm、深さ10～49cmであり、断面は皿状を呈する（第8・11図）。底面海拔高は31.43～31.50mである。この溝の東側肩口の一部では石組みが認められた。

また、主に調査区の中央から北側付近では、用水路の流路方向とほぼ平行に延びた溝状の窪みを呈する耕作痕を数条検出した。規模は幅10～30cm、深さ5～10cmであり、断面は皿状を呈する（第8・12図）。この他、柱穴（小土坑）を9本確認している（第8図）。以上、これらの時期は検出状況と出土遺物から近世以降と考えられる。中世包含層以下の第3・4層は人力で掘削しながら、遺構の検出作業を進めた（第10図）。その結果、弥生～平安時代の土坑5基、作業面1か所、たわみ3か所、柱穴（小土坑）58本を確認した（第9図）。旧地形をみると、北東から南西方向に下がっており、そのことを反映してか南西側の低位部には弥生時代、北東側の高位部には古墳時代以降の遺構が広がる傾向が認められる。なお、調査区の北側にあたる浅口市の確認調査のT37では、後世の削平が著しいため、遺構が確認できなかったとの知見が得られている（第3図）。



第8図 3区遺構全体図① (1/300)



第9図 3区遺構全体図② (1/300)

## 2 遺構

### 土坑1 (第13図)

調査区の中央西側に位置する。平面形は長径が現状で110cm以上、短径が55cmの不整楕円形である。

断面は皿状を呈し、深さは5cm、底面海拔高は31.23mである。図化し得ていないが、弥生土器の甕・高杯などの破片が出土している。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

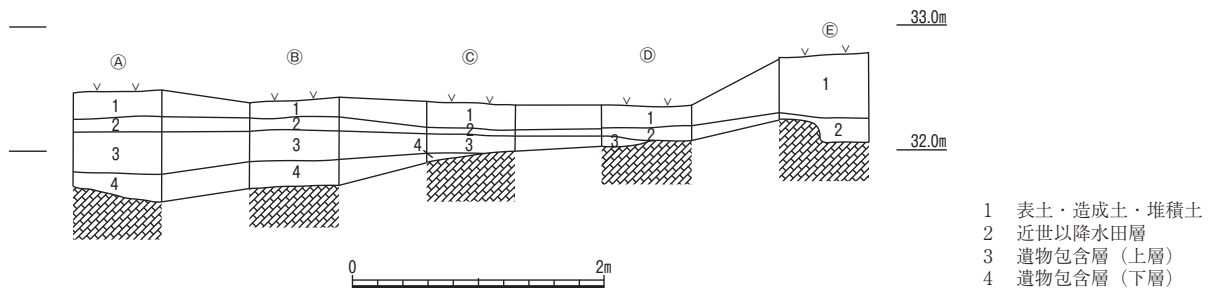
### 土坑2 (第14図)

調査区の中央西側に位置し、土坑1の約60cm南にあたる。平面形は長径が現状で112cm以上、短径が78cmの不整楕円形である。断面は皿状を呈し、深さは37cm、底面海拔高は31.03mである。

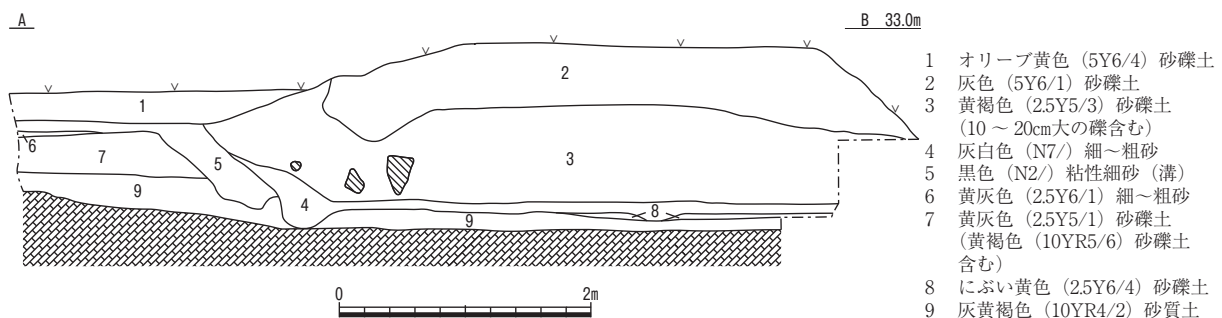
遺物は弥生土器の壺7や高杯8の破片が認められた。この他に図化し得ていないが、弥生土器の甕片なども出土している。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

### 土坑3 (第15図)

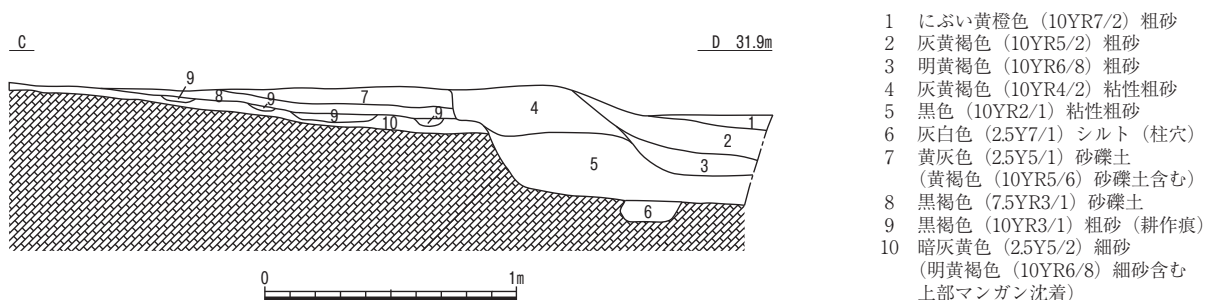
調査区の南側に位置する。平面形は長径102cm、短径63cmの不整楕円形である。断面は皿状を呈し、



第10図 3区東壁基本土層柱状模式図(1/60)



第11図 3区南壁断面図(1/60)



第12図 3区中央東西断面図(1/30)

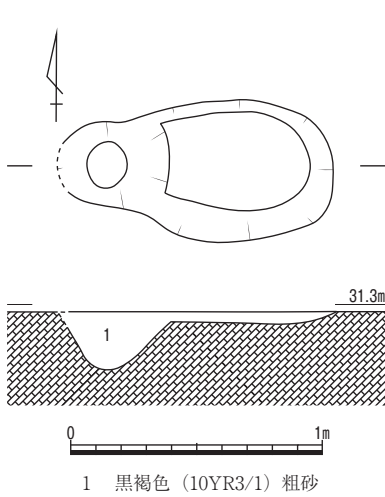
深さは18cm、底面海拔高は31.28mである。図化し得ていないが、弥生土器の壺・甕・高杯などの破片やサヌカイト剥片が出土している。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

土坑4 (第16図)

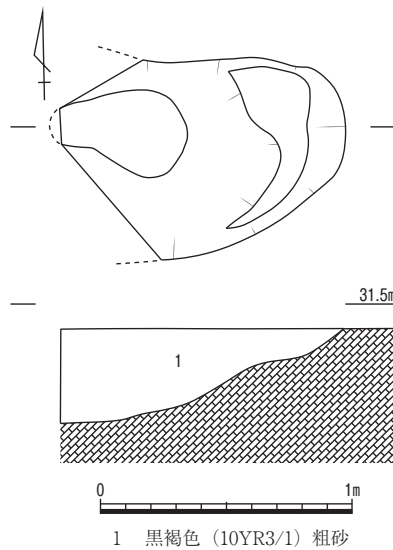
調査区の南西隅に位置し、土坑5によって東側が切られている。平面形は長径が現状で58cm、短径が50cmの不整楕円形である。断面は皿状を呈し、深さは37cm、底面海拔高は31.12mである。図化し得ていないが、弥生土器の壺・甕片などの破片が出土している。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

土坑5 (第17図)

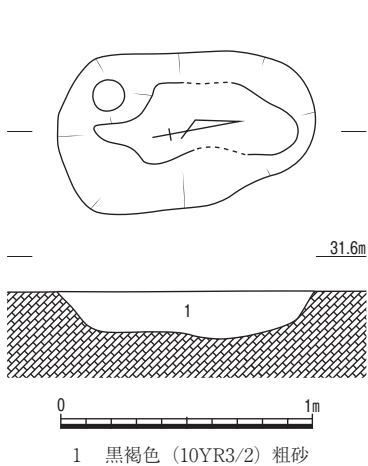
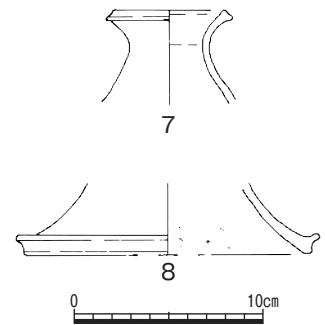
調査区の南西隅に位置する。平面形は長径93cm、短径68cmの不整楕円形である。断面は椀状を呈し、深さは45cm、底面海拔高は31.03mである。図化し得ていないが、弥生土器の壺・甕・高杯や須恵器などの破片が出土している。時期は古墳時代後期後半と考えられる。



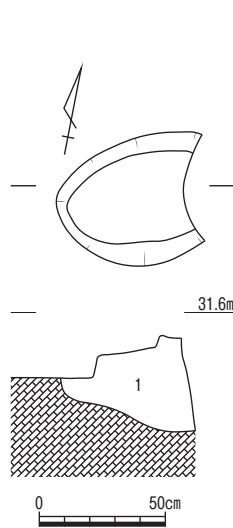
第13図 土坑1 (1/30)



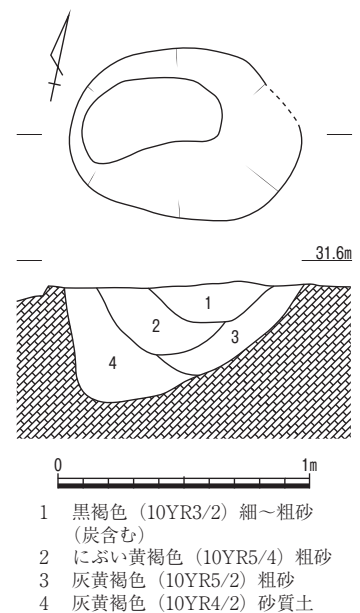
第14図 土坑2 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第15図 土坑3 (1/30)



第16図 土坑4 (1/30)



第17図 土坑5 (1/30)

作業面 1 (第18図)

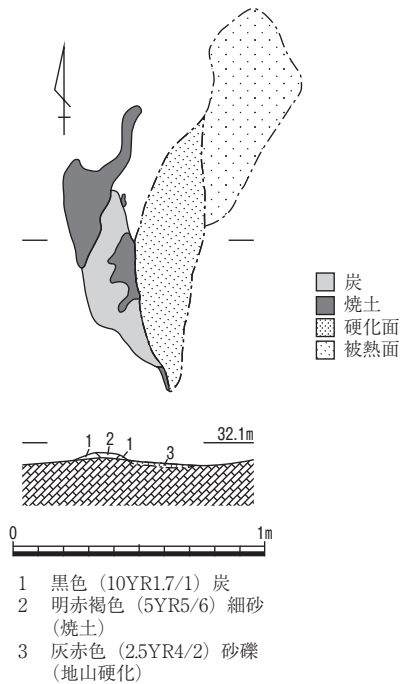
調査区の北東側に位置し、たわみ 1 の約30cm北にあたる。規模は現状で長径が154cm以上、短径が70cm以上の範囲と推測されるが、全体の平面形は後世の削平により判然としない。断面は皿状を呈し、深さは現状で3cm、底面海拔高は32.02mである。

埋土に炭・焼土が含まれ、底面には被熱痕跡が広がっている。また、部分的に熱影響による硬化面が認められる。内容は不明だが、熱・高温を要する作業を行っていた可能性がある。遺物は須恵器甕の破片が出土している。時期は古墳時代後期後半以降と考えられる。

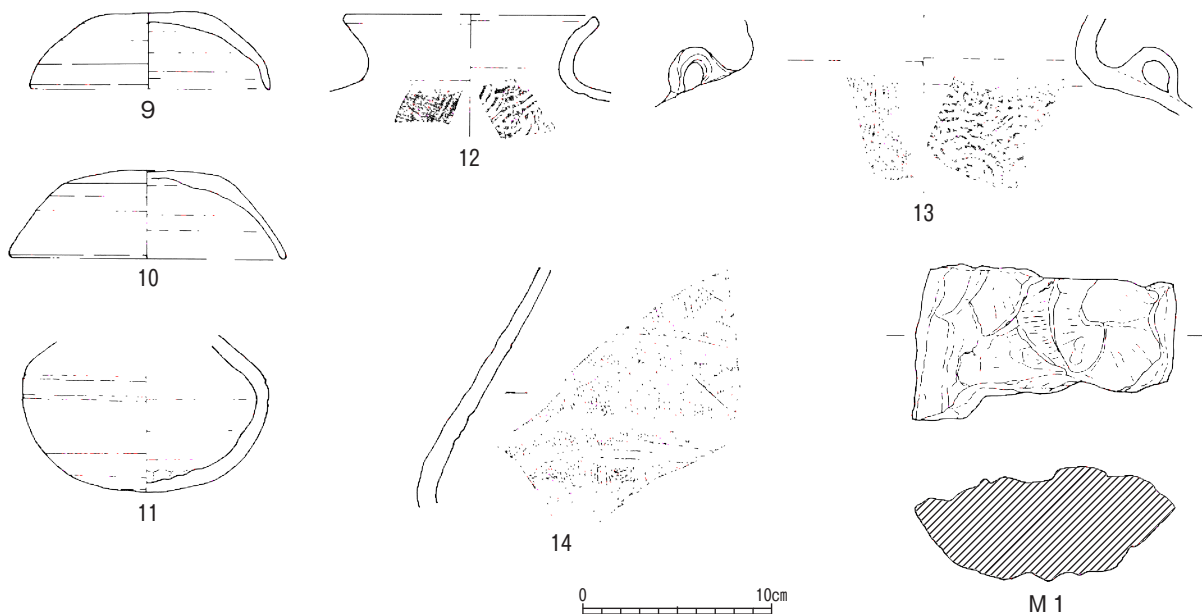
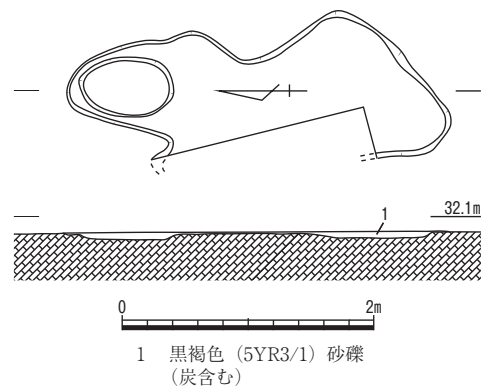
たわみ 1 (第19図、図版 3-2・4)

調査区の北側に位置する。平面形は長径が304cm、短径が現状で120cmの不整楕円形である。断面は皿状を呈し、深さは7cm、底面海拔高は31.92mである。

遺物は須恵器の杯蓋 9・10、壺11、甕14、甕類と思われる12・13や製錬滓(炉外流出滓)と推察される鉄滓M1などが認められた。鉄滓M1の断面形は幅約14cmのU字形を呈しており、製鉄炉に取り付く排滓溝の形状を現していると思われる。こうした状況から、遺跡周辺で鉄生産が行われた可能性がある。この他に凶化し得ていないが、土師器や器種不明の鉄製品の小片、炉壁片、拳大～約20cm大の礫4個などが出土している。時期は古墳時代後期後半と考えられる。



第18図 作業面 1 (1/30)



第19図 たわみ 1 (1/60)・出土遺物 (1/4)

たわみ2 (第20図)

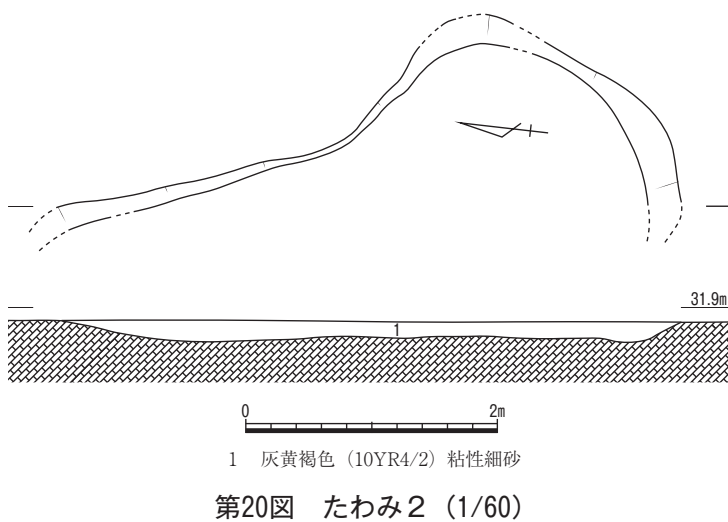
調査区の北側に位置し、たわみ1と近接する。平面形は現状で長径が510cm、短径が240cmの不整楕円形である。断面は皿状を呈し、深さは15cm、底面海拔高は31.62mである。この他に図化し得ていないが、弥生土器もしくは土師器、須恵器の甕などの破片やサヌカイト剥片が出土している。時期は古墳時代後期後半と考えられる。

たわみ3 (第21図)

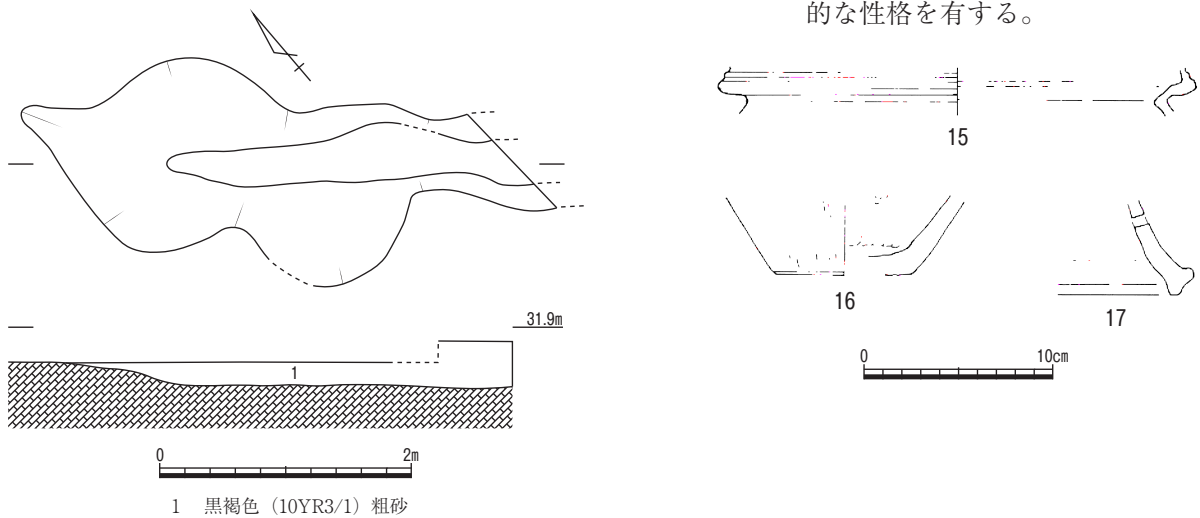
調査区の南東側に位置する。平面形は長径が現状で410cm、短径が155cmの不整楕円形である。断面は椀状を呈し、深さは37cm、底面海拔高は31.42mである。遺物は弥生土器の甕15・16、高杯17などの破片が認められる。この他に図化し得ていないが、弥生土器の壺片が出土している。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

柱穴 (第22~24図・図版3-3・4)

調査区の主に北半で平面形が直径約50cm程度の円形を呈する小土坑を検出した。ここでは形態的な特徴を踏まえて、まとめて柱穴として報告する。出土遺物と埋土の土質から判断して、暗褐色(10YR3/3)砂質土、黒褐色(10YR3/2)粘性細砂を基調とする弥生時代の柱穴が9本、灰黄褐色(10YR5/3)粗砂(炭含む)、褐灰色(7.5YR6/1)粗砂、黄灰色(2.5Y4/1)粗砂(炭含む)、にぶい黄橙色(10YR6/4)粗砂を基調とする古墳時代~古代の柱穴が49本、灰色(5Y6/1)シルト、黒褐色(10YR3/1)粗砂を基調とする中世以降の柱穴が9本の合計67本の柱穴を検出した。ただし、各時代とも建物の復元は困難であった。なお、以下の3本は他柱穴と比較して出土遺物が良好で、特徴的な性格を有する。



第20図 たわみ2 (1/60)



第21図 たわみ3 (1/60)・出土遺物 (1/4)



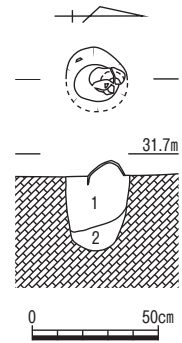
柱穴1は調査区の南東隅に位置する。平面形は長径が26cm、短径が現状で25cmの円形である。断面は筒状を呈し、深さは36cm、底面海拔高は31.32mである。埋土は第1層が黒褐色(10YR3/2)粘性細砂(マンガン沈着)、第2層が灰黄色(2.5Y6/2)粘性細砂である。

遺物は弥生土器の甕18などが出土している。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

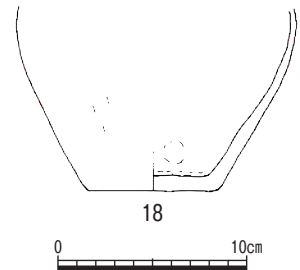
柱穴2は調査区の南側に位置する。平面形は現状で長径が52cm、短径が45cmの不整円形である。断面は椀状を呈し、深さは38cm、底面海拔高は31.10mである。埋土は黒褐色(10YR3/2)粗砂(炭含む)である。また、埋土中からは拳大程度の礫10個が出土し、根石と思われる11cm×10cm×15cm大の礫が底面で認められた。

遺物は弥生土器の甕19~23、台付鉢24、高杯25・26や磨製石斧S5などがまとまって出土した。この他に図化し得ていないが、弥生土器の壺片やサヌカイト剥片が出土している。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

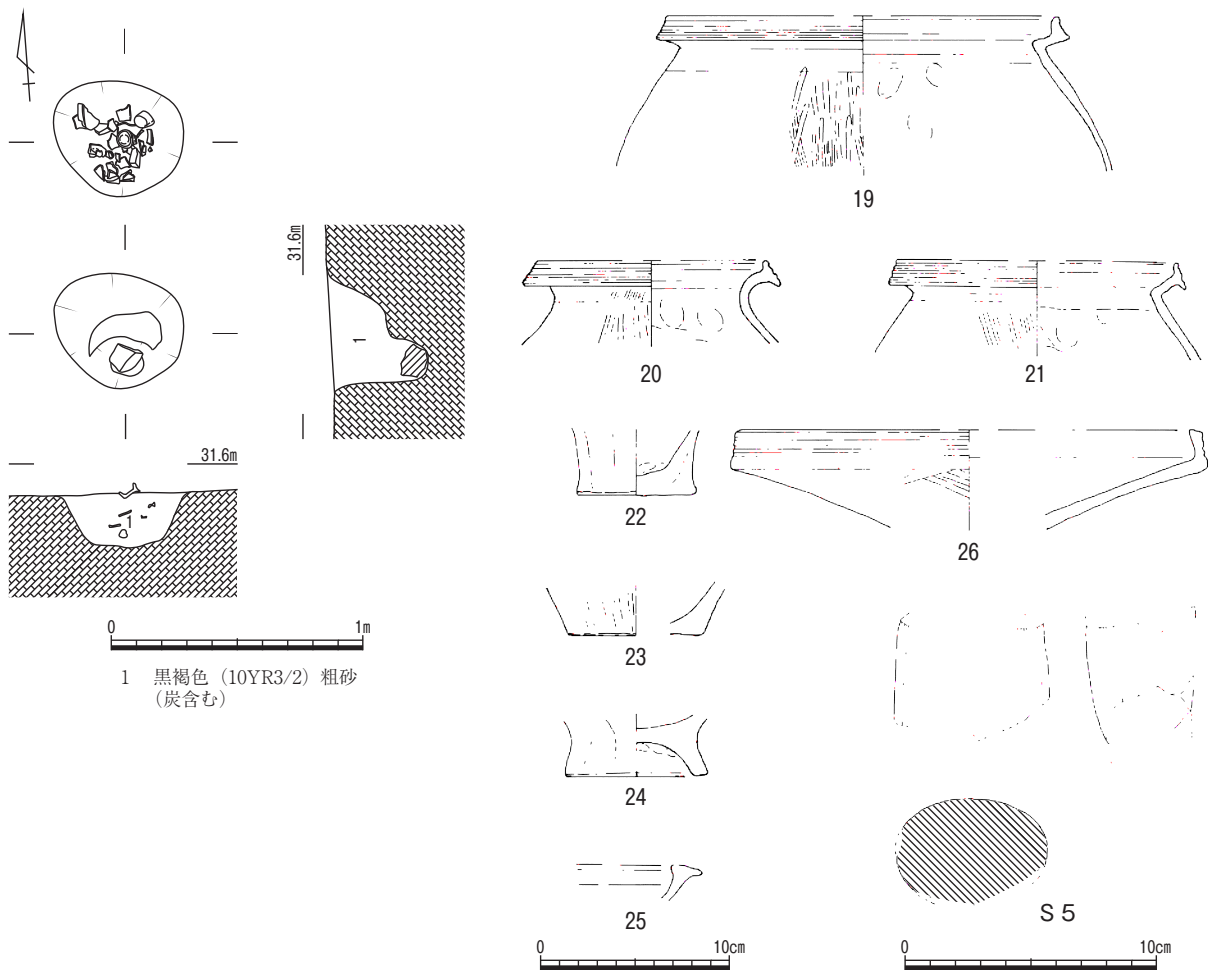
柱穴3は調査区の北西側に位置する。平面形は長径52cm、短径50cmの円形である。断面は椀状を呈し、深さは28cm、底面海拔高は31.39mで



- 1 黒褐色(10YR3/2)粘性細砂(マンガン沈着)
- 2 灰黄色(2.5Y6/2)粘性細砂



第22図 柱穴1(1/30)・出土遺物(1/4)



第23図 柱穴2(1/30)・出土遺物(1/4・1/3)

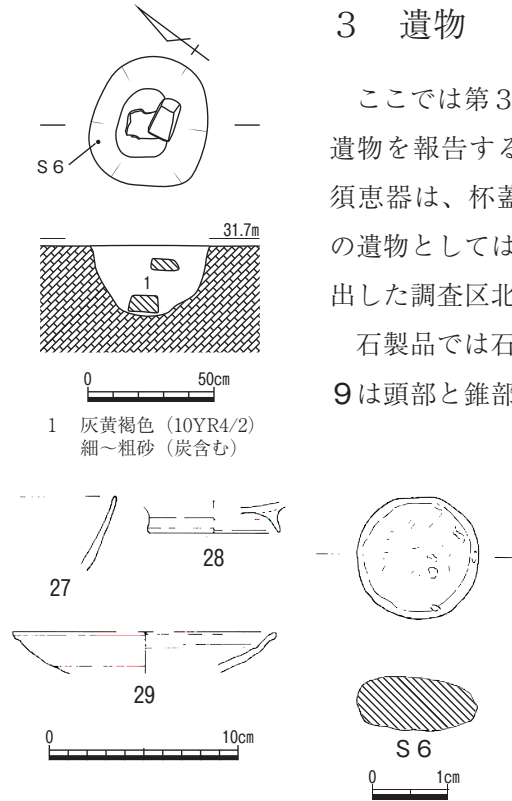
ある。埋土は灰黄褐色（10YR4/2）細～粗砂（炭含む）である。また、埋土中からは根石と思われる12cm×10cm×8cm大の礫が底面で認められた。遺物は内黒の黒色土器碗27、土師器碗28、軟質の緑釉陶器皿29の破片や暗緑色を呈する碁石状石器S6などが出土した。この他に図化し得ていないが、須恵器の小破片が出土している。時期は平安時代中期と考えられる。

### 3 遺物

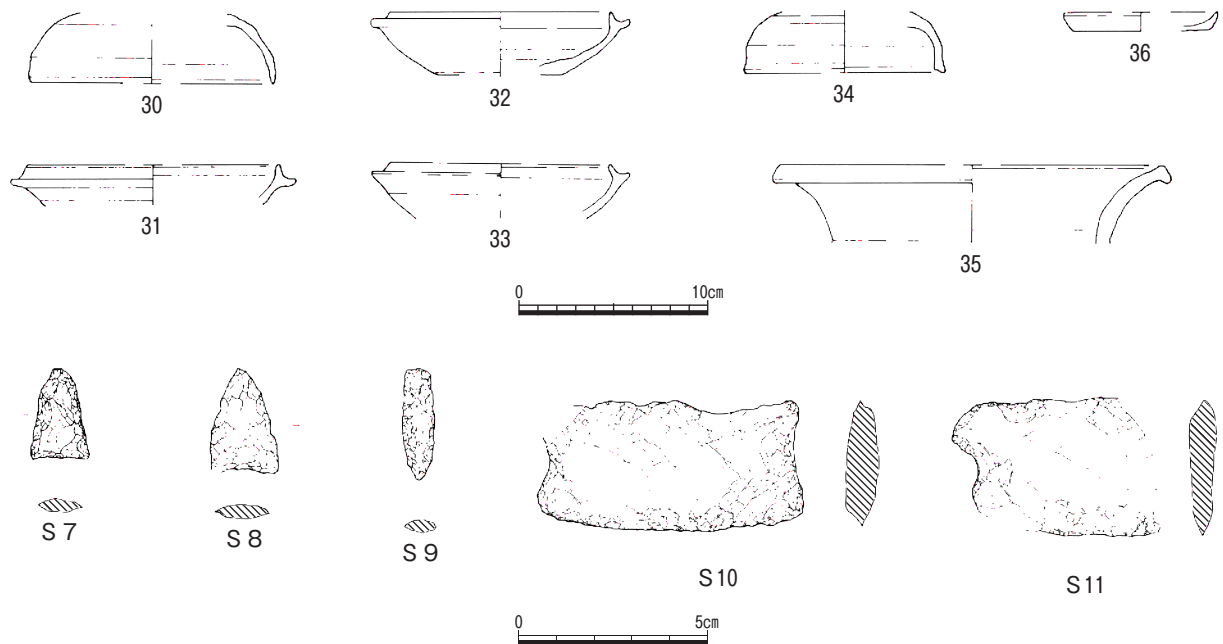
ここでは第3・4層相当の土層（第10図）から出土した遺構に伴わない遺物を報告する（第25図、図版4）。遺物量は整理箱に7箱程度であり、須恵器は、杯蓋30、杯身31～33、壺蓋34、甕35などが認められる。中世の遺物としては、土師器皿36が出土している。須恵器は主にたわみ1を検出した調査区北側でまとまってみつがっている。

石製品では石鏃が出土しており、S7・S8はともに平基式である。S9は頭部と錐部の境界がなく、ほぼ同じ幅をもった石錐である。S10・S11は打製石包丁である。いずれも欠損しているが、ほぼ長方形を呈していたと思われ、挟りが認められる。また、腹背面に刃部を有している。

この他に図化し得ていないが、弥生土器・土師器・黒色土器・亀山焼・青磁などの小破片やサヌカイト剥片、製錬滓と思われる鉄滓などが出土している。



第24図 柱穴3 (1/30)・  
出土遺物 (1/4・1/1)



第25図 3区包含層出土遺物 (1/4・1/2)

## 第4章 総括

今回の新池尻遺跡の発掘調査では、弥生時代中期後葉、古墳時代後期後半、平安時代中期の遺構・遺物を確認した。寄島山地北麓の佐方川上流域に立地する集落の展開が明らかになったことは、この地域の歴史を考える上で重要な成果であったといえる。ここでは事実関係に基づいて、遺跡の構造や時期的変遷などについて整理していくこととする。

新池尻遺跡は弥生時代中期後葉になって新たに出現した集落であり、その立地は第3章で述べたとおり、丘陵とその周辺部であったと思われる。以前から指摘されているとおり、同時期の岡山県南部地域の集落のあり方として、その大部分が丘陵に所在するとみてよく<sup>(1)</sup>、また、その集落数も中期中葉に比べて爆発的な増加が認められる<sup>(2)</sup>。新池尻遺跡は正にこの時期の集落相を示しているといえる。この時期に集落が丘陵等に進出した要因として、食糧生産の拡大に伴う人口増加<sup>(3)</sup>や新しい生活様式の選択<sup>(4)</sup>、集団間の政治的・社会的な緊張関係<sup>(5)</sup>などが想定され、新池尻遺跡もこうした影響を受けて形成されたと思われる。ただし、地理的環境からみて、瀬戸内海沿岸部や遙照山山地南麓との南北交流を行うのに比較的優位な場所に立地していると思われるにもかかわらず、出土遺物が示すように集落の存続期間は短く、弥生時代後期初頭には消滅しているようである。

この時期の集落の消長を検討するにあたっては、備讃瀬戸地域で認められる「高地性集落」のあり方が参考になると考えられる。近年、丘陵や台地、山頂や山腹に立地する集落を総称して「山住みの集落」、これに「軍事的・防衛的機能」を重視し、それが非日常性・日常性のなかで形成された集落、あるいはそういう機能が付加され変貌した集落のみを「高地性集落」と呼称し、両者は異なるものとする見方がある<sup>(6)</sup>。これに従えば、新池尻遺跡は調査成果から「山住みの集落」であったといえるが、海浜部との位置関係からみて、瀬戸内海沿岸社会に生じた緊張関係の影響は小さくなかったと思われる。これまでのところ、寄島山地で明確な「高地性集落」は認められていないが、この時期に丘陵で営まれた集落は、瀬戸内海沿岸社会との関わり方の深浅によって、その後の集落の消長に差異が生じたと思われる。つまり、新池尻遺跡は後期初頭の「高地性集落」の急速な解体と連動するかたちで新たな地域的なまとまりに移行していき、姿を消したと推測される。なお、弥生時代後期には、遙照山山地の標高340～370m、低位部の水田からの比高差290～300mに位置する山頂部に竹林寺天文台遺跡<sup>(7)</sup>が形成され、その山麓周辺にも集落が営まれ始める。今後はこうした事例も含めて、里見川流域の集落の動勢をみていく必要がある。

引き続き集落の展開が認められるのは、古墳時代後期後半である。今回の発掘調査ではたわみ1とその周辺でこの時期の須恵器が出土しているが、注目すべきは、これらと共伴した製錬滓と推察される鉄滓（炉外流出滓）や炉壁片である。残念ながら製鉄炉の痕跡は確認できなかったが、遺跡周辺で製鉄を行っていた可能性が高い。この時期、佐方川中流域に位置する奈良井遺跡<sup>(8)</sup>の谷部に堆積した古墳時代の包含層からも製錬滓とみられる鉄滓が出土しており、この遺跡周辺でも鉄生産を行っていたと推測される。加えて、ほぼ同時期にはこの奈良井遺跡や佐方川下流域に立地する岸名遺跡<sup>(9)</sup>（金光須恵古窯跡群）で、須恵器生産が行われていたことが明らかになっている。岡山県南部地域の須恵器窯の操業の画期は、六世紀後半あるいは六世紀末前後～七世紀前半期であり、須恵器の需要面

での変化や高まりに対応して窯は増加・拡散傾向を示すが、これらは中央政権の強い影響が及んでいとされる<sup>(10)</sup>。こうした生産体制のあり方は鉄生産においても同様であったと考えられており<sup>(11)</sup>、この時期の佐方地域周辺は鉄と須恵器の生産地として選地され、集落が形成されていったと思われる。そして、これらを掌握した人物は、第1章で述べた宮原1号墳<sup>(12)</sup>や奈良井古墳<sup>(13)</sup>の被葬者であったと推測される。ただし、中央政権の政策あるいは社会情勢の変化から、両者の生産活動は短期間であり、7世紀後半にはいずれの操業も衰退あるいは停止したようである。

最後に集落の展開が認められるのは、平安時代中期である。注目すべきは、土師器碗・黒色土器碗・緑釉陶器皿の破片や暗緑色を呈する蛇紋岩製の基石状石器が出土した柱穴3である。特に緑釉陶器や基石状石器はいずれも奢侈品であることから、何らかの意図を持って埋納された可能性がある。なお、緑釉陶器については、基本的には宮殿・官衙・貴族邸宅・寺院などでの祭祀や儀式に使用されたものと考えられている<sup>(14)</sup>。一方で、私的空間の奢侈品であって実用の器として多く用いられたのではないかといった考えもある<sup>(15)</sup>。いずれにしても当地において、緑釉陶器を所有もしくは使用することができた階層が存在したこと示す資料として重要といえる。

## 註

- (1) 宇垣匡雅「吉備の弥生社会の諸問題」『考古学研究会例会シンポジウム記録1 論争吉備』 考古学研究会 1999
- (2) 平井 勝「東部瀬戸内地域の弥生集落－中期後半における画期を中心に－」『みずほ』第30号 大和弥生文化の会 1999
- (3) 松木武彦「人口と集落動態からみた弥生・古墳移行期の社会変化 吉備中南部地域を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集 国立歴史民俗博物館 2014
- (4) 重根弘和「岡山県南部の弥生時代集落遺跡」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』上巻 古代吉備研究会 2002
- (5) 註1・2文献
- (6) 柴田昌兎「高地性集落と山住みの集落」『考古資料大観』10 小学館 2004
- (7) 「竹林寺天文台遺跡」『浅口市埋蔵文化財発掘調査報告』2 浅口市教育委員会 2009  
「竹林寺天文台遺跡」2 『浅口市埋蔵文化財発掘調査報告』3 浅口市教育委員会 2016
- (8) 「奈良井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』237 岡山県教育委員会 2013
- (9) 「〔7〕岸名遺跡発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』9 岡山県教育委員会 1979
- (10) 山本悦世「邑久古窯跡群における須恵器生産とその背景」『考古学研究会例会シンポジウム記録6 古墳時代の備讃瀬戸』 考古学研究会 2009
- (11) 大道和人「日本古代鉄の開始と展開－7世紀の箱形炉を中心に－」『たたら研究』第53号 たたら研究会 2014
- (12) 『金光町史』本編 金光町史編纂委員会 2003
- (13) 「奈良井古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』237 岡山県教育委員会 2013
- (14) 齋藤孝正「日本の緑釉・三彩陶器の流れ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第86集 国立歴史民俗博物館 2001
- (15) 尾野善裕「平安時代における緑釉陶器の生産・流通と消費 尾張産を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第92集 国立歴史民俗博物館 2002

表2 遺構一覧表

遺構名	旧遺構名	平面形	断面形	規模 (cm)			底面海拔高 (m)	時期	備考
				長径	短径	深さ			
土坑1	No.05	不整楕円形	皿状	(110)	55	5	31.23	弥生中期後葉	
土坑2	No.04	不整楕円形	皿状	(112)	78	37	31.03	弥生中期後葉	
土坑3	No.10	不整楕円形	皿状	102	63	18	31.28	弥生中期後葉	
土坑4	No.11	不整楕円形	皿状	(58)	50	37	31.12	弥生中期後葉	
土坑5	No.07	不整楕円形	椀状	93	68	45	31.03	古墳後期後半	
作業面1	No.12	不明	不明	(154)	(70)	3	32.02	古墳後期後半以降	
たわみ1	No.13	不整楕円形	皿状	304	(120)	7	31.92	古墳後期後半	製錬滓・炉壁出土
たわみ2	No.14	不整楕円形	皿状	(510)	(240)	15	31.62	古墳後期後半	
たわみ3	No.06	不整楕円形	皿状	(410)	155	37	31.42	弥生中期後葉	
柱穴1	No.08	円形	筒状	26	(25)	36	31.32	弥生中期後葉	
柱穴2	No.09	不整円形	椀状	52	45	38	31.10	弥生中期後葉	
柱穴3	P 3	円形	椀状	52	50	28	31.39	平安時代中期	緑釉陶器・基石状石器出土

表3 遺物観察表

## 土器

掲載番号	遺構名・出土地名	種別	器種	計測値 (cm)			色調 (外面)	残存状況	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高			
1	1・2区包含層	弥生土器	甕	14.8	-	(6.9)	にぶい黄橙色(10YR6/4)	口1/3	口縁部凹線文3条
2	1・2区包含層	弥生土器	高杯	13.8	-	(3.2)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	口1/5	口縁部凹線文4～5条
3	1・2区包含層	弥生土器	台付鉢	7.8	-	(8.6)	橙色(7.5YR6/6)	口1/4	
4	1・2区包含層	土師器	椀	9.6	3.0	3.5	浅黄橙色(10YR8/4)	底1/4	高台部エビオサエによるゆがみ
5	1・2区包含層	土師器	椀	10.7	3.3	3.5	にぶい黄橙色(10YR6/4)	底2/3	高台部エビオサエによるゆがみ
6	1・2区包含層	土師器	鍋	[29.0]	-	(9.2)	浅黄色(2.5Y7/4)	口1/11	
7	土坑2	弥生土器	壺	5.8	-	(5.0)	橙色(7.5YR6/6)	口1/3	
8	土坑2	弥生土器	高杯	-	[14.8]	(3.8)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	底1/7	
9	たわみ1	須恵器	杯蓋	12.6	5.5	4.3	灰白色(N7/)	口1/2	天井部ヘラキリ未調整
10	たわみ1	須恵器	杯蓋	14.4	3.9	4.8	灰白色(N7/)	口1/4	天井部ヘラキリ後、ヘラケズリ
11	たわみ1	須恵器	壺	-	2.0	(8.3)	灰白色(2.5Y8/1)	底1/1	胴部沈線2条
12	たわみ1	須恵器	甕?	13.2	-	(4.4)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	口1/6	
13	たわみ1	須恵器	甕?	-	-	(4.9)	灰色(N6/)	胴小片	釣手をもつ
14	たわみ1	須恵器	甕	-	-	(13.0)	灰白色(N7/)	頸小片	頸部沈線5条
15	たわみ3	弥生土器	甕	-	-	(2.6)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	口小片	口縁部凹線文2条以上
16	たわみ3	弥生土器	甕	-	7.0	(4.3)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	底1/2	
17	たわみ3	弥生土器	高杯	-	14.4	(5.0)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	底1/6	脚部円孔・透かし孔
18	柱穴1	弥生土器	甕	-	6.8	(9.7)	赤褐色(2.5YR4/8)	底3/4	
19	柱穴2	弥生土器	甕	[20.6]	-	(8.2)	橙色(5YR6/6)	口1/13	口縁部凹線文3条
20	柱穴2	弥生土器	甕	[12.0]	-	(4.5)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	口1/12	口縁部凹線文3条
21	柱穴2	弥生土器	甕	[14.7]	-	(5.1)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	口1/13	口縁部凹線文4条
22	柱穴2	弥生土器	甕	-	6.2	(3.5)	にぶい橙色(5YR6/4)	底1/3	
23	柱穴2	弥生土器	甕	-	7.0	(2.9)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	底1/4	
24	柱穴2	弥生土器	台付鉢	-	7.5	(3.3)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	底1/1	
25	柱穴2	弥生土器	高杯	-	-	(2.0)	暗赤褐色(5YR3/2)	口小片	
26	柱穴2	弥生土器	高杯	[23.6]	-	(5.3)	にぶい橙色(5YR6/4)	口1/12	口縁部凹線文3条以上
27	柱穴3	黒色土器	椀	-	-	(3.0)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	口小片	内黒、内外面ヘラミガキ?
28	柱穴3	土師器	椀	-	7.0	(1.7)	浅黄橙色(10YR8/3)	底1/4	
29	柱穴3	緑釉陶器	皿	[13.8]	-	(2.2)	浅黄橙色(10YR8/3)	口1/7	軟質、断面浅黄橙色(10YR8/3)
30	3区包含層	須恵器	杯蓋	[12.8]	-	(3.7)	灰色(5Y5/1)	口1/12	
31	3区包含層	須恵器	杯身	[13.2]	-	(2.1)	灰白色(N7/)	口1/8	
32	3区包含層	須恵器	杯身	11.6	6.6	(3.3)	灰白色(5Y7/1)	口1/4	
33	3区包含層	須恵器	杯身	11.6	-	(2.9)	灰色(N6/)	口1/4	
34	3区包含層	須恵器	壺蓋	10.6	-	(3.2)	灰白色(N7/)	口1/4	口縁部外傾気味に面取り
35	3区包含層	須恵器	甕	[20.2]	-	(4.1)	灰白色(N7/)～灰白色(N8/)	口1/8	頸部外面細い斜状の工具痕、凹線文
36	3区包含層	土師器	皿	8.0	7.0	(1.0)	明黄褐色(10YR6/6)	口1/3	

土製品

掲載番号	遺構名・ 出土地名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調 (外面)	焼成	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚					
C1	1・2区包含層	土錘	63.5	31.0	30.5	62.63	にぶい橙色(7.5YR6/4)	良好	ほぼ完形	管状土錘

石製品

掲載番号	遺構名・ 出土地名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S1	1・2区包含層	石鏃	(18.1)	13.2	2.4	(0.66)	サヌカイト	先端部欠損	平基式
S2	1・2区包含層	石鏃	(20.4)	16.7	4.5	(0.99)	サヌカイト	先端部欠損	凹基式
S3	1・2区包含層	石槍	(43.1)	28.4	8.9	(16.96)	サヌカイト	両端部欠損	断面六角形
S4	1・2区包含層	スクレーパー	56.2	45.0	9.6	21.79	サヌカイト	完形	
S5	柱穴2	磨製石斧	(55.0)	(62.0)	(44.0)	(232.37)	安山岩	両端部欠損	
S6	柱穴3	碁石状石器	16.3	16.1	7.3	3.07	蛇紋岩	完形	暗緑色(5G3/4) 側面研磨・面取り
S7	3区包含層	石鏃	24.2	15.7	3.4	1.35	サヌカイト	完形	平基式
S8	3区包含層	石鏃	(27.5)	(18.0)	4.0	(1.86)	サヌカイト	基部欠損	平基式
S9	3区包含層	石錐	29.5	8.6	4.3	1.04	サヌカイト	完形	棒状
S10	3区包含層	石包丁	(70.5)	34.5	10.3	(30.63)	サヌカイト	挟り部欠損	
S11	3区包含層	石包丁	(55.7)	37.0	7.3	(18.99)	サヌカイト	挟り部欠損	

鉄滓

掲載番号	遺構名・出土地名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
M1	たわみ1	鉄滓	8.4	13.7	6.6	986.75	製錬滓(炉外流出滓)?

1 新池尻遺跡遠景  
(南から、浅口市所蔵)



2 1区南側完掘状況  
(北から)



3 2区南側完掘状況  
(北から)



## 図版2



1 2区西側完掘状況  
(北から)



2 3区南側完掘状況  
(北から)



3 3区西側完掘状況  
(南から)



1 3区東側完掘状況  
(北から)



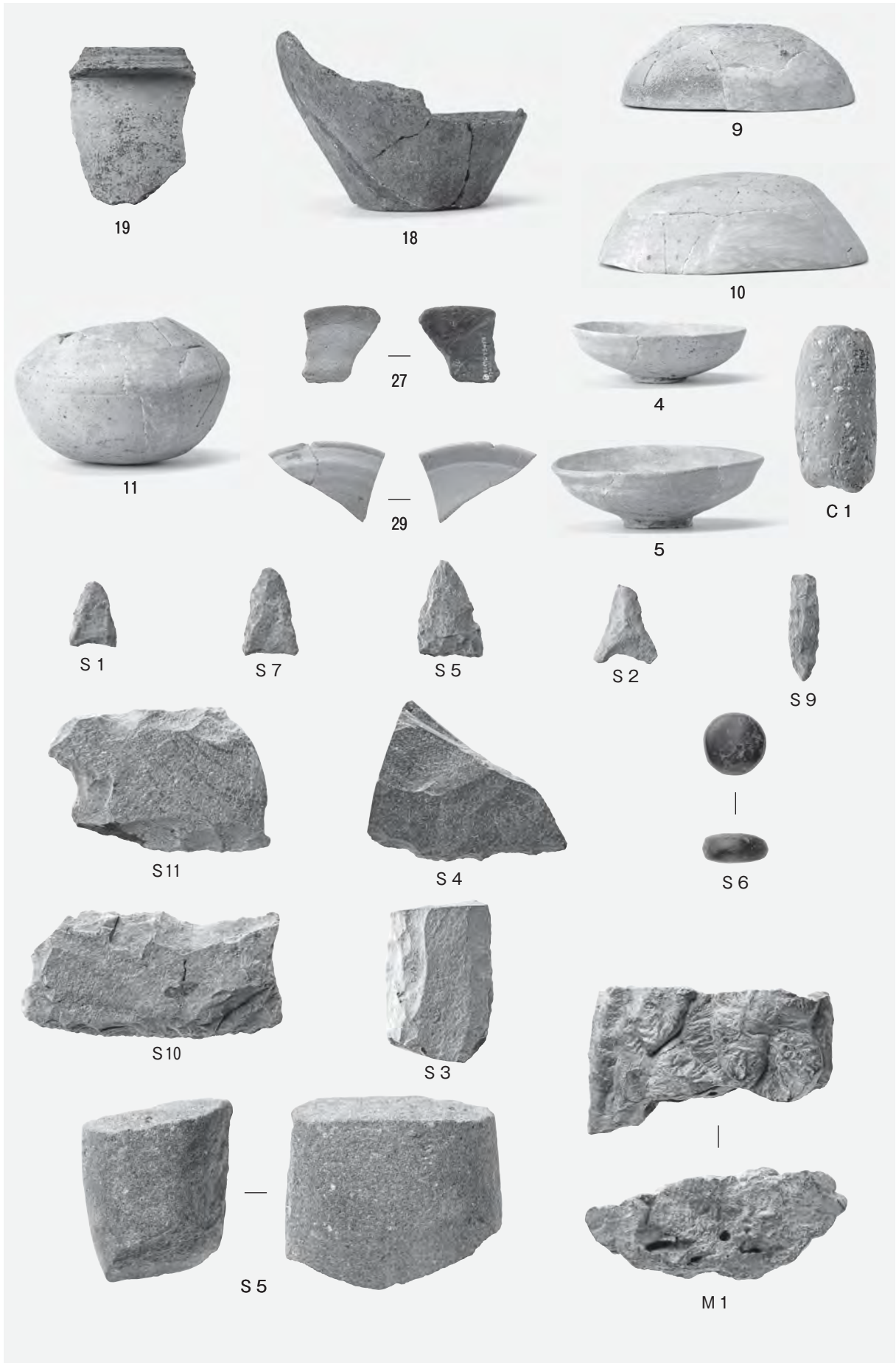
2 たわみ1 (西から)



3 柱穴2 (南から)



图版 4



出土土器・土製品・石製品・鉄滓

# 報告書抄録

ふりがな	しんいけじりいせき							
書名	新池尻遺跡							
副書名	県道南浦金光線道路改築に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	248							
編著者名	澤山孝之・大橋雅也							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 URL <a href="http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm">http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm</a>							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL086-224-2111							
発行年月日	2019年3月8日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
新池尻遺跡	岡山県浅口市金光町佐方3032-6ほか	33216	334420085	34° 30' 57"	133° 36' 42"	20170401～20170731	1,500	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
新池尻遺跡	集落	弥生時代	土坑4基・たわみ1か所・柱穴9本		弥生土器・石製品・土製品			
		古墳時代～平安時代	土坑1基・作業面1か所・たわみ2か所・柱穴49本		須恵器・土師器・緑釉陶器・鉄滓・炉壁・石製品			
		近世以降	柱穴9本・溝1条・水田		陶磁器・須恵器・土師器			
要約	<p>当遺跡は寄島山地北麓の浅口丘陵を北へ流れる佐方川の上流に位置する。調査対象地の現況は水田・畑地や果樹園であり、標高は約32～35mである。調査地南側の1・2区では、遺物包含層から弥生時代～中世の遺物が出土したものの、明確な遺構面を確認することができなかった。調査地北側の3区では、弥生～平安時代の集落を確認した。このうち、古墳時代後期後半のたわみからは、須恵器片と製錬滓と推察される鉄滓や炉壁片が出土した。また、平安時代中期の柱穴1本からは、黒色土器・緑釉陶器片と暗緑色を呈する基石状石製品が出土した。その後、中世段階の調査地の状況は判然としないが、少なくとも近世以降は、水田として利用された。</p>							



岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 248

新池尻遺跡

県道南浦金光線道路改築に伴う発掘調査

平成31年3月8日 印刷

平成31年3月8日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会  
岡山市北区内山下2-4-6

印刷 旭総合印刷株式会社  
岡山市北区内山下2-10-3

